

Title	史的研究と修史學(二)
Sub Title	
Author	今宮, 新(Imamiya, Shin)
Publisher	三田史学会
Publication year	1929
Jtitle	史学 Vol.8, No.4 (1929. 12) ,p.79(587)- 88(596)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19291200-0079

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

史的研究所修史學(二)

第二節

さてこゝに考慮すべきことは、如何なる時代に於ても、人類の多數存すると同様に、多くの事件の發生することである。廣義に解すれば、此等の事件は何れも歴史上の事實である。然しながら、他方に於ては、何人も此等の事件の中、只少數のものゝみが「歴史的」重要性を有する事を是認するであらう。最も詳細に書かれた日記、又は不在の友人に宛てた書翰に於てさへも、日常生活の平凡な事件は之を省略するのが常である。これと同様に、公の事件に關しても、常に取捨選擇が行はれ、之に依て、「重要」な事件だけが摘出され記憶されるのである。而して又事件の重要性に關しては、自

ら幾多の差別が生ずるものである。例へば一都市の破壊は、一帝國の滅亡に比して記憶される價値がとぼしいものと認めらるゝのである。更に又或る意味から言へば、多くの事件はその内容より見て記憶されるべきものではなくて、その結果の反響如何に應じて記憶されるべきものゝ様である。例へば、顯官及官吏の暗殺が、一時世の非難を受けたのみで、忽ちにして世間より忘れ去られる場合もあり、或は文明の基礎を震動せしめる場合もあるが、要するに之はその犠牲となつた人が、その當時如何なる地位を占めてゐたかに依て決せらるゝものである。歴史は個人の種々の行爲に就て述べるものであるけれども、常にその一般社會の問題との關係如何を注意するものである。即ち歴史が或る

個人の行爲に注意するは、その個人が例へ一時的にもせよ、彼がその一部をなす或る團體の存亡名譽と密接な關係を有する爲である。要するに、歴史の注意する事實は平凡でない事件である。即ち種々の理由に依て、世人の注意を喚起すべき事件である。従つて多くの歴史が戦争に就て記録し、人民の日常生活を無視するのは當然の事である。且つ又、年代記に記録された事柄は、當時の世人にとつては、異常な事件と思はれたものであることは疑ない所である。例へばアングロ・サクソン年代記 (Anglo-Saxon Chronicle) には次の如き記事があるのである。

紀元七百九十三年、此年ノーサンブリア人 (Northumbrians) の國に恐るべき前兆あり、人民を甚だしく恐怖せしめた。即ち空中に非常なる電光ひらめき、旋風起り、火龍は蒼天を走つた。間もなく此等の恐るべき前兆について大飢饉が起つた。……。

紀元八百九十年、……此年又アングムンド (Plegmund) は上帝及び總ての聖徒に選ばれて、カンタベリー (Canterbury) の大僧正の職に就いた。

紀元八百九十一年、此年……復活祭後臨時所禱日の頃、もし

くはそれ以前の頃に、書上のラテン語でコメタ (Cometa) と言はるゝ星が現れた。或人は英語でこの星を「毛星」と稱すべしと言ふ。何となれば、この星より長い閃光が或は此方に、或は彼方に遠く放たれるからである。

之と同様に、何れの時代に於ても、普通の事件と異常の事件、即ち「歴史的」に見て取るに足らない事件と、「歴史的」に重要な事件とを區別するに就ては、其時代特有の標準が存するのである。此處に於て、歴史研究家は、一つの問題に遭遇する。即ち、歴史研究家の目的は、實際の事實がどうであつたかを決定するに在ることとは言ふまでもないが、彼は事實の記述を爲すにあつて、從來の記録に限定さるゝに至ると言ふ點である。而も、此の從來の記録は、全く研究者自身とは異つた思想や判断に基いて選擇せられたものである。それ故に、「歴史家にとつて、事件の輕重に對する大切な判断力となるものは、直接事件に關係した人々の、その事件について有してゐる意見より確かなるはない。」或は又、「事件に對して、眞に同情的の論述を爲さうとすれば、その關係者の意見を土

臺とするより外はない。」⁽¹⁾と説く者があるけれども、此の意見は、異常なる事件、例外なる事件、重要なる事件に關する判断の基礎が、時代と共に變化すると言ふ點を無視したものである。換言するならば、當代の年代記作者も後代の歴史家も、一定不變の標準に依て、事件に關して注意すべき點を決定するものではないのである。各種の標準は、無意識にその作者自身の思想の聯想に従つて變動して行くものである。實際、近代の歴史家はその參考とした典據、即ち史料に於て述べられた事實をその儘に承認することをせず、「例へ如何なる偉人賢人であつても、何人も自分の行動の意義を充分理解し得るものではない。」と言ふ假定を設けるのである。かくて、我々が過去の事件に就て、理解ある記述を爲し得るのは、我々がその事件の起つた當時の人々でない爲であると信ずるのである。要するに、これは永久に變化して止まない現代の常に動搖しつゝある趣味が、過去に起つた確定的の事件に對して、その輕重の標準を構成するものであるとの意味である。この主觀的見解が一般

に是認せられてゐることは、ゲイテの次の如き言葉が屢々引用されることを以て見ても明である。即ち彼は、「歴史は絶へず書き改められなければならないのであるが、それは、多くの新事實が発見される爲ではなく、事件の新局面が世人の注意に覺り、時代の進運に關係した人々が、新しい方法を以て過去を觀察し判断する見地に立つが爲である。」と言つてゐる。マーク・パチソン (Mark Pattison) は「新事實が絶へず増加する爲でなく、考證の段々と嚴密となる爲でなく、又文體が變化する爲でもなく、只、思想が變化し、事件を觀察する總ての方法が時代と共に變化し、かくて時代が異ると共に、過去の事件は、その時代獨特の型に作り直すことが必要となつて來る爲に、その祖先の歴史は、その時代の見地よりして更に書き改むることを必要とするのである。」⁽²⁾と言つてゐる。

歴史家の目的は、過去に起つた事件を記述するにある。嚴密に言へば、過去に起つた事件に就て述べられた利用し得る證據に就て考證を試みた後行ふところの再述である。然し、近代の歴史家は

その當時の報告者の意見を、そのまま歴史的に重要なるものとして承認する事はないのである。反つて彼等はフレグムンド及慧星の記事を放棄し、偶然なる暗示を綜合して、當時の人々が日常平凡な事として、直接その記録に止めなかつた生活の状況を再述せんと試みるのである。本來の記録は其の當時起つた非常に多數の事件の中から、その當時の思想に依て取捨選擇されたものである。近代の再述は、現在世に行はれてゐる思想を基として、本來の記録の限定された内容から取捨選擇されたものである。故に歴史事實の取捨選擇の基礎は主觀的であり、且つ何れの時代に於ても、其の當時過去に對して下した批判は、後世の研究家にとつては、過去の知識に對する貢獻と云ふよりも、寧ろ思想上の記録に過ぎないと言ふ結果になるのである。

「現在世に現れた大歴史家の多數は、數世紀の後には多分事件の忠實な信用すべき記録者としてよりも、寧ろ特別な研究方法を示し、政治上、社會上、文學上の進歩に關して特別な意見を示したものと注意を引くであらう。そして彼等の或者が、

自ら得意になつて標榜してゐた客觀性も、彼等を左右した先入觀念からまねかれたのではなく、只之を彼等が意識しなかつたのであると認めらるゝであらう。」⁽³⁾

「歴史家は、彼の周圍を動いてゐる宗教的哲學的政治的思想に依て、知らぬ間に支配されてゐる。例へばボッセエ(Rosset)の『一般史』ホルテール(Voltaire)の『ルイ十四世の世紀』ギゾー(Gизо)・オーグスタン・チエール(Augustin Thierry)マコーン(Macaulay)ドロイザン(Droysen)ランケ(Ranke)の作物は、文明或は國民的教養の或る状態の特別の産物に外ならないことを示すのは容易の事である。約言すれば、藝術の歴史に於て、流波及び様式を年代づけ得ると同様に、歴史的概念も年代づけ得るのである。」⁽⁴⁾

更に又、歴史家が、その正しいと認めた材料を取扱ふ方法に依て、想像的要素が歴史的叙述に取り入れらるゝことがある。若しも史的研究の方法が、我々に興味ある事實だけを、史料より拔萃する事を許さないで、文書に含まれた總ての事件を研究すべき事を要求したならば、研究者は、我々が不問に附してゐる事實が、何故にその當時の人々には重大なるものと認められたかを探究せざるを得なくなるだらう。何れの時に於ても、何が記録

に止むべき異常なる事件又は價值ある事件であるかの判断を下す事は、その當時行はれてゐた思想全體の結果である。そして、記録者が記録したものは、只單に彼一個の判断を示してゐるばかりでなく、彼の屬してゐる社會全體の判断を示すものである。こゝに於てか我々は、歴史とは單に、「人々の言ひ且つ行つた事」のみではなく、「特に人々の考へた事」をも指すものであると言ふメーランド(Maitland)の格言の意義あることを知るのである。而して、この點からして、更に幾多の重要な研究上の諸問題が生じて來るのである。かくて、我々は如何にして思想が発生したか、思想と行動との間に如何なる關係が存するかを研究しなければならぬ。そしてこの研究は、過去に於ける思想の實際的發生及び之に依て起つた行爲の變化の跡を尋ねる純然たる歴史的事業の序論をなすものである。直接の觀察と經驗とに依て、「個人が客觀的世界を知り、彼の行動を之に順應せしむる過程」⁽⁵⁾を決定するのは、心理學の任務であるが、それと同様に歴史は之を時代の上に及ぼし、

同一の過程の結果を研究するものである。かゝる研究にとつては、遠い過去の時代より保存せられてゐる總ての記述は、客觀的價值を有するものであることは言ふまでもない。

然るに、近代の歴史家は他の方面より心理學に接近するに至つた。即ち、事件の記述に於て、偏見を發見することを目的として、記録者がその記述した事件と如何なる關係を有するかの問題に注意を集中する様になつたのである。⁽⁶⁾この結果として、個人の動機に關する如き單純な推測を歴史の中に混入するに至るのである。而してこれは、各自が日常生活に於て爲してゐる方法であるからして當然のことである。我々は常に他人の行動を類推に依て判断し、他人も又我々自身に於て認むると同じ動機に依るとするのである。そして歴史家は過去の記録者の意見、又は歴史上の人物の行動を説明するに、同一の心理的推理を用ふるばかりでなく、この想像力の十分に行はるゝことを以て、能力ある學者の眞の證據であると認むるのである。

ランケに就いてフイツター(Factor)は言つてゐる。「……彼はそれ自身に於て、確かに歴史的心理学者として彼の最も重要なことを爲しとげた。……ランケは性格の内部にまで侵入しようとなつたのである。……歴史的心理学にかくの如く深い愛着を以て注意を向けた者は此までに唯もなかつたのである。少くとも歴史家其者には全くなかつたのである。……彼は歴史的の人物の心的活動を、その微細なる點まで明白にしなければやまなかつた。彼は他人の感情に入り込んで、そして、その思想を後から感ずべき能力、即ち彼の言葉をかりて言ひば『ペネトリエール』^{ペネトリエール}入する』能力を非常に多く有してゐたのである。(7)

スタップス(Stubbs)に就て、その一人の親友は次の如く言つてゐる。「彼の歴史的本能は、彼をして人物の批判、事件の成行についての判断を正しく爲さしめたばかりではなく、人が或る一定の事情の下に於て、如何なる行動を爲すかを、驚く可き正確さを以て豫言する力を與へたものである。(8)

スタップス自身も次の如く書いてゐる。「その研究に従事してゐる時代の大人物の性格に就いて、一定の意見を立つることは、歴史研究家にとつて實に必要な事である。歴史は將某の問題の如く解釋し得るものではない。その様に之を解釋せんと試みるものは、全然歴史を解するの能力がないものである。登場人物を單なる人形に過ぎないと考へるならば、歴史上の事件を理解することが出來ず、又その教訓を學ぶことも出來ない。(9)

ヘンリー・ネットルシップ(Henry Nettleship)は言つてゐる。「歴史家は單に眞理の愛好者でなく、又單に事件の記録者で

もない。實に歴史家は、如何なる危険を冒しても眞理の愛好者、事件の記録者でなければならぬのであるが、しかも、更に歴史家の任務は大なるものがある。それは人間性の洞察である。

——この中に、人の爲し得る事に就いての非凡な知識と敏感な同情とが含まれてゐる。即ち行爲と動機との間の微妙な關係を明にする能力、及び環境に對する行爲、行爲に對する環境の力を明らかにする能力、一言にして言ふならば、最も高尚の意味に於ける世間の知識が含まれてゐる。(10)

アクトン卿は「性格學は近代史を以て始まる。」となしてゐる。(11) 彼は又他の著書で、次の如く言つてゐる。「責任ある著作家の人格、地位、經歷、動機は調らべなければならぬ。そしてこれは、他の適當な言葉で言ふならば、記述の眞想を極める爲の從屬的な、そして屢々機械的な仕事に比して、所謂高等批判と呼べるものである。(12)

フアース教授の意見は、「第十七世紀の歴史を書かうとする」その當時の人は、「事件に就て非常に詳細な報告を集めることが出來る。然し、これは必竟するに皮相な一般的なものにちがひないのである。彼は皮相な觀察を脱して、事件の原因及び人物の動機を説明することが出來ない。」と言ふのである。(13)

オックスフォード大學の一教授は言つてゐる。「ヴィゲル大尉(Captain Vidal)は單にスルト(South)の複雑な精神……將軍達の氣持を明らかにしたばかりではなく、南フランスの軍隊、役人、人民の氣持をも明らかにしたのである。(14)

最後に、ホガース(D. G. Hogarth)の辨證(Apologia)を

参照すると、全くその趣を異にするものがある。「古人の残した彼等の行動についての記録から、古人の動機を推測するの興味は深く自分を動かした。——この研究に於ては、賭博者の心を動すと同じ様な興味がある。——そこで自分は或る偉大なる人の純正なる傳記を書かんと決心したのである。」⁽¹⁵⁾

さて我々は近代人であるが、ハリカルナソス(Halicarnassus)のデオニシウス(Dionysius)はテオポムプス(Theopompus)に就て、次の如く書いてゐる。「彼の立派な、そして最も特色ある性質は記すべき價がある。……即ち、如何なる場合に於ても一般の人々に明らかに知られてゐることを洞察し、記述する才能ばかりではなく、尙又、多くの行爲や、人物のかくれた動機、或は心裏に含まれてゐる感情(一般民衆に依て容易に識別し得ざるもの)をも吟味し、外見上の美德、及び、隠れたる惡徳の秘密をも、すべて曝露するの才能が之である。實際、自分は、肉體を離れた靈魂が、他界に於ける審判の以前に、地獄に於て受けると言ふ傳説的の審問は、テオポムプスの著書に依て行はれた審問と同じ様に、深刻なものであると充分信ずることが出来るのである。」⁽¹⁶⁾

我々は事實上、自分の周圍の人々と交際するにあつて、彼等の感情や希望に對する推測を基礎としてゐるにも拘らず、何人も直接に他人の心裡に起りつゝあるものを、観察し得ないことは明白

である。この推理方法は、我々が共に教育され又親密な交際を結んでゐる人々に對して適用した場合に、實際その正しき事を知るのである。之に反して、「心理學者の陥りやすい誘惑は、自分自身の場合に於て、或る心的過程の自然の表現たるべき或る行爲又は態度は、それ故に他人の場合に於ても、同様な意味を有するに違ひないと推測するの傾向である。」⁽¹⁷⁾我々は現代の人々に對してさへも、絶えず誤解を爲してゐるのである。そして、「心理學者の精神と、彼が研究しつゝある精神との間の差異が、著しくなるに従つて解釋が益々困難となるのである。」⁽¹⁸⁾それ故に、「我々の時代と、その一般の境遇及び状態を全く異にしてゐる」時代の人の精神状態を研究する場合には、「我々は、その問題に關係を有してゐる、總てのものに考證を加へた後でなければ、充分批判的な態度を取つてはならないのである。」⁽¹⁹⁾それにも拘らず、歴史家は大膽にも、自分を過去の時代に投げ込んで、そして、想像をほしきまゝにして、アレキサンダーやアッチラの行動を、近代の讀者に心理的に了解せ

しめんと努めるのである。是の如き態度を採る場合に於て、歴史家は、事實を自己の性格に依て左右し、之に包括的な色彩を與へて、物語の興味を誇張するのである。

知られてゐる事實、又は文書に書かれた事實にだけに、その記述を極限する事を公言してゐる歴史家にとつては、動機の歸因を明かにせんとする事は危険な試みである。(20) 然してこの動機の歸因を推測することは、それ自體に於て、事際疑問を存するばかりではなく、これは又史的研究の要求と一致しない態度に導くものである。事實上、他人の動機に關する推測には、殆ど必ずその人の行動に就ての判断が伴ふものである。それ故に、アクトン卿は次の如く言つてゐるのである。「余は諸君が決して道徳上の相場を貶さざること、及び、正義の標準を低下せしめざること、而して、諸君自身の生活を支配する最後の準則を以て他人を批判しないこと、及び、歴史が悪事に對して加へ得る力を有する不滅の刑罰より、何人をも何物をも逃れせしめざること」を望むものである。(21) 是の如

き判断の法式に對して、最初に警告を發した者が倫理學の大家であつたと言ふことは、注意されるべきことである。グリーン (F. H. Green) は言つてゐる。「もしも重要な歴史上の人物の(意志とは異なる)動機に就ての推考を除くならば、多くの歴史は疑もなく、非常に短縮せられ、そして更に無趣味のものとなるであらう。而して我々は、又行動より動機に對する推測を基礎として、現代人の色々の行動を批判することを直ぐには止めないだらう。然し、すべて此の場合に於て、我々は非常に不確實な根據に立つものである。……それ故に、我々はたゞ單なる推測に過ぎない場合は、寧ろ多くの推測を下さず、そして、……人物の性格を省みることなしに、その影響に依て行爲の價値を定むるだけに止めることが、賢明なるやり方である。」(22)

そこで、歴史家は自己の局限された見解に從つて、自分の著作の内に包括さるべき事實を「取捨選擇」し、關係者の性格及び動機を想像的に復活して、事件の「説明」をなすのである。かくて、事實の

「取捨選擇」と「性格の眞實視」とは、修史學の根本的要素と思はるのである。然し、この事實の意義を充分會得しようとするならば、さらに眼界を廣く他の方面に向けなければならぬ。(29) (未完)

註

- (1) Mandell Creighton, "Introductory Note," Cambridge Modern History (New York, 1902), I, 5.
- (2) 'Gregory of Tours' [1845], in his Essays (Oxford, 1889), I, 2. F. H. Bradley, The Presuppositions of Critical History (Oxford, 1874.) 參照。「かくして、我々についての歴史は、推測の結果である。要するに、自己の推測に訴へて、歴史として、事件の記録として存在するものである。而して、此の推測は何等根據の無い背景から生ずるものではない。即ち推測は我々の精神の孤立した斷片的な行動ではなく、根本的に、我々の全意識と關係を有し、又之に依つて左右されるものである。それ故に過去は、現代と共に變化し、そして實際に於て變化せざるを得ないのである。何となれば、過去の基礎をなすものは、現在にあるからである。而して、今の現在には、過去を條件とするものがあり、又過去の必然的豫定概念がある。」
- (3) J. T. Merz, A History of European Thought in the Nineteenth Century (Edinburgh, 1896), I, 7.

- (4) Henri Pirenne, Revue historique, 64 (1897), 52.
- (5) G. F. Stout, Manual of Psychology (2nd ed., London, 1904), P. 4.
- (6) ランクは「特に歴史家自身及び歴史家の記述の時に於ける意向を正確に心理的に再現する」とを試みた。「Edward Fueter, Geschichte der Neueren Historiographie (München 1911) P. 479.
- (7) 「今の記述は既に過去のいふべきかを決める筈には、我々は全體としての文書を記すや場合の「記述者の」特定の目的は同じであつたか、同じく更に「文書を撰取する箇々の記述をなす場合の」彼の特別の目的は同じであつたかを考へ入ふべきである。」C. V. Langlois & C. Seignobos. Introduction to the Study of History, tr. by G. G. Berry (New York, 1903), P. 166.
- (8) Fueter, as cited, pp. 477-78.
- (9) W. H. Hutton, William Stubbs, Bishop of Oxford (London, 1906), p. 169, Dr. G. L. Darby, Dean of Chester. の註。
- (10) Historical Introductions to the Rolls Series, ed. By Arthur Hassall (London, 1902) p. 89.
- (11) Lecture and Essays, 2d series, ed. by F. Haverfield (Oxford, 1895), p. 245.
- (12) History of Freedom, and other Essays (London, 1909), p. 409.

- (12) A Lecture on the Study of History (London, 1896), pp. 41-42.
- (13) "The Development of the Study of Seventeenth-Century History," Royal Historical Society, Transactions, 3d ser., 7 (1913), 28-29.
- (14) O. Oman, English Historical Review, 29 (1914), 590.
- (15) Accidents of an Antiquary's Life (London, 1910), p. 2.
- (16) Tr. by W. R. Roberts in The Three Literary of Dionysius (Cambridge, 1901), p. 125.
- (17) G. F. Stout, as cited, p. 22.
- (18) Stout, as cited, p. 21.
- (19) Stout, as cited, p. 23.
- (20) 「歴史に想像的の談話を入れるやり方は、今や一般に行はれなくなつた。それで近代の歴史家は、この憤み深い態度に對して充分に償ひを受けた。而して歴史家は、演説者の口より、想像的の言葉を述べしめなむとて、彼は彼等の行動に就しては、想像的の動機を暗示するのやむを得ない。」 Sir G. C. Lewis, A Treatise on the Methods of Observation and Reasoning in Politics (London, 1852), 1, 243.
- (21) A Lecture on the Study of History, (London, 1896), p. 63. R. G. Latham などの歴史家 (マンロー) は「歴史の記述は Man and His Migrations (New York, 1852), pp. 9-10. 參照: 「帝國の基礎が鞏固に建設せられた」

- 争闘は解決をつけ、主義が主張され、かくて歴史家が之を記述する。然し歴史家の事業は更に大なるものがある。もしも彼が、彼の職業に忠實たらんとするならば、箇々の當事者について、その行動の源泉を研究し、その道徳的及び知的品位を批評し、彼等の行動として表れるに至つた動機に就て、稱讚又は非難の判断を下すべきである。」
- (22) Prolegomena to Ethics, ed. by A. C. Bradley (Oxford, 1883), pp. 318-19.
- (23) 此の節の題目に就して更に次のものを參照せよ。 Carl Becker, "Detachment and the Writing of History," Atlantic Monthly, 106 (1910), 524-536.